

# 古代日本語の「動詞+着」について

楊 金 萍\*

## On the *V+tsuku* of the Ancient Japanese

YANG Jinping

### abstract

There are many verbs showing the forms of the *V+tsuku* both in ancient and modern Japanese. Based on the collocation, this paper researched the effects of the verb connected with *tsuku* in the ancient Japanese and made the characters of the *V+tsuku* clearly.

Keywords : *V+tsuku*, ancient Japanese, collocation, characters of the *V+tsuku*

### 1. はじめに

日本語には「落ち着く」「帰り着く」のような「動詞+着」で構成された動詞が数多く見られる。楊(2009)で『今昔物語集』(以下『今昔』と略す)に見られる「動詞+着」構造を文レベルからパターン化し、古代中国語の“動+着”構造と比較し、『今昔』の「動詞+着」構造の特徴を明らかにした。

楊・肖(2010)ではさらに日本古典全般を対象に、そこに見られる「動詞+着」構造を分析し、文レベルからパターン化した。本稿では連語論的な立場から「動詞+着」構造の動詞に与えた影響を探り、古代日本語の「動詞+着」構造の特徴を明らかにする。

### 2. 先行研究

現代中国語(北京語)においては“動詞+着”構造で状態や動作の持続を表している。

例(1) 他骑着自行车。

彼は自転車に乗っている。(筆者訳)

また、次の例(2)のように、一部分の南方方言には動作の完了を表している用法もある。

例(2) 我作着业。(広東語)

私は仕事をしてしまった。(筆者訳)

于根元(1983)では中国語の存在文および連動式の場合、“動詞+着”で動作・行為の完了とともに結果の状態持続が実現することを表すと指摘されている。また、宋玉柱(1988)では下記の例が取り上げられ、静態存在文には“着”と“了”は同じで、両者の入れ替えができると指摘されている。

例(3) 桌子上放着一个茶杯。=桌子上放了一个茶杯。

机の上に湯飲みが1つ置いてある。

これらの研究を踏まえて、丸尾誠(2007)は中国語の“動詞+着”“動詞+了”の動作主の標識の有無および各動詞の有する意味特徴が分析されて、比較されている。

一方、彭飛(2007)<sup>1</sup>では現代中国語の“動詞+着”と日本語の「動詞+テイル」構文が比較されている。「動

---

キーワード：動詞+着、古代日本語、連語論、「動詞+着」構造の特徴

\*平成12年度生 国際日本学専攻

詞+テイル」の動詞が動きの最中、心的状態の持続、結果の残存、単純状態、複数事象を表す時、中国語に訳されると、「動詞+着」が用いられるが、経験・完了を表す時、「動詞+着」が用いられないと指摘している。

しかし、古代中国語の“動詞+着”構造についての研究は主になぜ持続相を表すようになったのか、及びこの変化はいつ始まったのかである。

例えば、王力（1958）では動詞“着”は南北朝時代から形式化し、動詞の後に付き、“在”（存在する）の意味を表すようになったと指摘している。つまり、下記の例に見られる“動詞+着+地点”の“着”は場所を表す格助詞「に」に近い役割をする介詞であると思われる。

例(4) 長文尚小，载着车中。……文若亦小，坐着膝前。（《世说新语·德行》）

上例の“载着车中”（車の中に載っている）と“坐着膝前”（膝の前に坐っている）においては、“着”は場所を明示する介詞である。そして、唐になると、下記の例(5)のようにこの構造には対象、つまり、目的語が見られ、“着”は“到達”（到達する）という意味を表すようになった。

例(5) 日暮拂云堆下过，马前逢着射雕人。（杜牧《游边》）

また、宋に入って、“着”はすでに助動詞化したにもかかわらず、“了”との区別がつかず、“動詞+着”で完成相を表し、“動詞+了”で継続相を表していたが、17世紀になってから現代語と同じような使い分けがはっきり見られると指摘している。

例(6) 杨志因等候我了，犯着这罪。（《宣和遗事元集》）

例(7) 若不实说，便杀着你。（《三国志平话卷中》）

上記の例に見られる“犯着这罪”（この罪を犯してしまった）と“便杀着你”（ただちにあなたを殺してしまう）はつまり現代中国語の“犯了这罪”、“便杀了你”の意である。つまり、“着”があることによって、動作“犯”“杀”が完了したという意味になっているのである。

梅祖麟（1989）では六朝時代の“着”が静的な“在”と動的な“到達”に変化し、静的な“在”は現代中国語の持続相の語尾になり、動的な“到達”は宋以後の南方方言の現象として、上海や湖南省、湖北省の方言の完成相の語尾になったと指摘している。つまり、

例(8) 彼既自眼不明，只管将册子上语，依样教人。遮个作么生教得？若信着遮般底，永劫参不得。（《大慧书·答曾侍郎开第三书》）

例(9) 古人胸中发生意思自好，看着三百篇，则后世诗不足观矣。（《朱子语80》）

に見られる“若信着遮般底”（このようなことを信じてしまえば）と“看着三百篇”（三百篇を読んでしまって）は“着”があることによって、動作“信”“看”が完了したという意味を表している。

蒋绍愚（2006）では先行研究を踏まえ、継続相の助動詞“着”の性質および助動詞化の歴史的な過程がまとめられている。それにより、後漢までは“着”は動詞として使われており、「付着する」という意味を表していた。そして、後漢から“着”は動詞の後ろにつき、“動詞+着”で動詞の結果を表すようになった。魏晋南北朝になると、“着”は本来の動詞としての役割が徐々になくなり、助動詞になった。そして、隋唐になると、“動詞+着”で持続相と完成相を表すようになったのである。

例(10) 持続相：余时把着手子，忍心不得。（张骞《游仙窟》）

完成相：莫为此女损着符（府）君性命。（《敦煌变文·叶净能诗》）

上記の例に見られる“把着手子”（手をとっており）は“着”に後接されることによって、動作“把”の持続状態、つまり、持続相になっている。また“损着符（府）君性命”（府君の命を損害してしまう）は“着”に後接されることによって、動作“損”の完了、つまり、完成相になっていると言っている。

蒋绍愚は表1のように“動詞+着”構造を四種類に分けている<sup>2</sup>。

表1. 古代中国語の“動+着”構造

時代	パターン	例文	動詞の性質	“着”の役割
魏晋南北朝	①動1 a+着1 +L	坐着车中	静的な空間運動 [-位移]	着1 ≈存在
	②動1 b+着2 +L	送着寺中	動的な空間運動 [+位移]	着2 ≈到達
隋唐以後	③動2 a+着3 +O	把着手子	動作動詞 [+持続]	着3 =持続相
	④動2 b+着4 +O	损着府君	動作動詞 [-持続]	着4 =完成相

(動1は空間運動を表す動詞で、動2は普通の動作動詞である。また、Lは場所を表す名詞で、Oは動作の対象である。)

楊 (2009) では『今昔』に見られる「動詞+着」構造が二分類されている。それぞれ以下の通りである。

例(11) 馬ハ南天竺ノ陸ニ至リ着テ臥タリケレバ、商人等皆、乍喜ラ下ヲリヌ。馬ハ人ヲ下シテ後ニ搖消ツ様ニ失ヌ。(『今昔卷第五語第一』)

例(12) 其ノ時ニ目連、佛ノ御許ニ詣テ言サク、「流離王ノ軍又可来シ。我レ今、流離及ビ四種ノ兵ヲ他方世界ニ擲ゲ着ム」ト。佛ノ宣ハク、「汝ヲ釋種ノ宿世ノ報ヲ豈ニ他方世界ニ擲ゲ着ムヤ」ト。(『今昔卷第二語第卅八』)

上記の2例に見られる「至リ着テ」「擲ゲ着ム」の「着」は補助成分として動詞「至る」「擲ぐ」の連用形に接続して、「至る」「擲ぐ」という動作が完了したという意味を表し、「至リ着」「擲ゲ着」全体で完成相になっていると指摘している

そして、例(11)のような構造が [I] パターンで、「場所+動詞+着」の形をしており、例 (12) のような構造が [II] パターンで、「対象+場所+動詞+着」の形をしていると文レベルから『今昔』に見られる「動詞+着」構造をパターン化している。

表2. 『今昔』に見られる「動詞+着」構造のパターン

パターン	パターン形
[I]	場所+動詞+着
[II]	対象+場所+動詞+着

楊・肖 (2010) では幅広く日本の古典文献<sup>3</sup>を調べ、『今昔』に見られる [I] パターンと [II] パターンのほかに、例(13)に示されたような [III] パターンも存在していることが明らかになった。

例(13) 又、この男、もののたよりに、聞きわたる人、ありけり。その人ぞとは、この男にももの言ふ人は友だちにて、もの何にても言ひわづらひ、まめやかに、男のために苦しかるべきことを、言ふと聞きて、からうじて、言ひ着きにけり。『平中物語第一六』

つまり、表3に示されたように、古代日本語に見られる「動詞+着」構造を三つのパターンに分けることができるということが明らかになった。

表3. 古代日本語に見られる「動詞+着」構造のパターン

パターン	パターン形
[I]	場所+動詞+着
[II]	対象+場所+動詞+着
[III]	対象+動詞+着

楊 (2009)、楊・肖 (2010) では自動詞か他動詞かという立場からも「動詞+着」構造の動詞を考察した。その結果、[I] は自動詞で、[II] と [III] は他動詞であり、また、[I] と [II] は方向性のある動詞で、[III] は普通の動詞であることが明らかになった。詳しくは表4の示すとおりである。

表4. 古代日本語に見られる「動詞+着」構造の動詞の特質

パターン	動詞の特質	動詞例
[I]	方向性のある自動詞	至る、還る、等
[II]	方向性のある他動詞	擲ぐ、渡す、等
[III]	普通の他動詞	言ふ、思ふ、等

さらに、蔣紹愚（2006）で提示された古代中国語の“動詞+着”構造の四つのパターンと比較し、両言語の同構造の相違点をまとめた。その結果、古代日本語の「動詞+着」構造はいずれも前項の動詞が表す動作の完了を表しており、動作自体の持続ではないので、古代中国語の動作の継続を表す③“動2a+着3+O”に相当するものがない。また、古代日本語の[II]は文法的な役割が中国語②④に似ているが、構造的にはかなりの差があるので、独特な構造であると思われる。一方、古代日本語の[I]は場所があり、対象語がなく、また、動作の完成を表しているので、古代中国語の②“動1b+着2+L”と似ており、古代日本語の[III]は場所がなく、対象語があり、また、動作の完成を表しているので、古代中国語の④“動2b+着4+O”に似ているということが明らかになった。

王学群（2002、2004）、張岩紅（2006）などでは比較言語学の立場から現代中国語の“動詞+着”の意味特徴が分析されているが、古代日本語に見られる「動詞+着」および古代中国語の“動詞+着”との比較研究は楊（2009）、楊・肖（2010）のほかには管見の限り見当たらない。要するに古代日本語には“動詞+着”構造で動作の完了を表す完成相用法があり、また、現代中国語にも南方方言の完成相用法があるということが明らかになっている。

しかし、古代日本語に見られる「動詞+着」は構造上中国語に似ているにもかかわらず、独特な面も持っている。

### 3. 「動詞+着」構造についての連語論的な立場からの再検討

松本（2006）では主語と述語でできた文の骨組みを補う成分として補語などが立てられている。その下位区分としてさらに直接補語と間接補語が立てられ、そして、日本語には間接補語として三種類の補語があると指摘されている。そのうち、「行く」「来る」「帰る」などの移動動詞や「歩く」「走る」など移動の方式を表す動詞が二格、へ格、マデ格の空間名詞を間接補語にとると指摘されている。要するに、日本語の場合、二格補語をとるか、へ格補語をとるか、動詞の種類によるところが大きいと思われる。

楊（2009）、楊・肖（2010）の調査では、古代日本語に見られる「動詞+着」構造は文レベルから三つのパターンに分けられ、それぞれに使われる動詞は大きく分けると、[I]は方向性のある自動詞であり、[II]は方向性のある他動詞であり、[III]は普通の他動詞であるという三つの種類になっているということが明らかになった。表5は日本の古典文献に見られる「動詞+着」構造を作る動詞の全般を掲示するものである。本節ではこれらの「動詞+着」構造を作る動詞を中心に、その特徴および「着く」に後接された結果、連語論的にどのような変化が生じたかを検討することにする。

表5. 古代日本語に見られる「動詞+着」構造の動詞

自動詞	他動詞	
上がり着く、歩み着く、至り着く、踊り着く、御し着く、帰り着く、駆け着く、来り着く、下り着く、吹き着く、参り着く、罷り着く、持ち上がり着く、詣で着く、行き着く、寄り着く、渡り着く	方向性のある他動詞	普通の他動詞
	追い着く、送り着く、襲い着く、擲げ着く、遣り着く、渡し着く、将着く	言い着く、打ち着く、思い着く、搔き着く、漕ぎ着く、併べ着く、

（下線の動詞は例で詳しく検討するものである）

まず、自動詞を検討する。

例(14) 比丘ノ思フ様、「此ノ翁ハイミジカルベキ盗人カナ。我レ母ニダニ速ク行テハ告ム」ト思テ走り行ク。家ニ行き着テ這入テ見レバ、白髪ナル嫗一人芋ヲ續テ居タリ。(『今昔卷第四語第卅五』)

上記の例においては、息子が蛇に噛まれて死んでしまったのを目の前に、翁が無関心のように耕しているのを見て、遊行の比丘は早速その子供の母親のところに行って消息を告げようと思って走って行ったが、その「家ニ行き着テ這入テ見」と、お年寄りの嫗がいた。「日本に行く」「学校に行く」に示されたように、「行く」という動詞は移動動詞として空間移動の補語、つまり間接補語として二格名詞をとることができる。一方、「家ニ行き着テ」では、「動詞+着」構造で、「行く」という動作が完了したということを表しているが、連語論的な面では「行く」との差異がなく、同じく二格名詞をとることができる。

例(15) 恋しさもつらさも同じほだしにて泣く泣くも猶帰る山かなことことなき御心の中ながら、辛うじて、下山に歩み着き給へるにぞ、「いつしか」と、たてまつらせ給へる御迎への人々、参り集りたる。(『狭衣物語』)

上記の例においては、動詞「歩む」は移動動詞として、「道を歩む」「公園を歩む」に示されたように、移動の空間を表すヲ格名詞が必要であるが、「着く」に後接されることによって動作の完了のみならず、到着の場所である二格名詞が予想される。つまり、「歩む」には「着く」に後接されることによって連語構造の変化が生じたということになっている。

例(16) 国ノ人、後ロヲ疑フ事无クシテ此レヲ不知ズ。而ル間、自然ラ、西ノ風出来テ、船ヲ、箭ヲ射ガ如ク直シク、筑紫ニ吹キ着タリ。(『今昔卷第十六語第二』)

上記の例においては、動詞「吹く」は自然現象を表す動詞で、「風が吹く」「北九州では強い風が吹くでしょう」のように、動作主である主格のほかにも、場合によって場所を表すデ格名詞が必要となるが、「着く」に後接されたことによって動作の完了のみならず、到着の場所である二格名詞も必要になる。つまり、「吹く」には「着く」に後接されることによって連語構造の変化が生じたということになっている。

以上、自動詞を考察した。楊(2009)、楊・肖(2010)では自動詞はいずれも方向性のあるものであると指摘したが、今回の検討では詳しくは方向を表す動詞、移動を表す動詞、自然現象を表す動詞に分けられるということが明らかになった。そして、「着く」に後接されることによって動作が完了したという完成相を表しているにもかかわらず、三種類に分かれ、つまり、「行く」のようなもともと二格名詞を取る類と、「歩む」のようなもともとヲ格名詞を取るもので、「着く」に後接されることによって、二格名詞も要求されるようになる類と、「吹く」のような場所を表すデ格名詞を取るもので、「着く」に後接されることによって、到着の場所である二格名詞も要求されるようになる類であると思われる。言い換えると、「着く」に後接されることによって一部の動詞には連語構造の変化が生じたのであると思われる。

次は、方向性のある他動詞を検討する。

例(17) 其ノ時ニ目連、佛ノ御許ニ詣テ言サク、「流離王ノ軍又可来シ。我レ今、流離及ビ四種ノ兵ヲ他方世界ニ擲ゲ着ム」ト。佛ノ宣ハク、「汝ヲ釋種ノ宿世ノ報ヲバ豈ニ他方世界ニ擲ゲ着ムヤ」ト。目連ノ云ク、「實ニ宿世ノ報ヲバ他方世界ニ擲ムニ不堪ズ」ト。(『今昔卷第二語第卅八』)

上記の例においては、「實ニ宿世ノ報ヲバ他方世界ニ擲ムニ不堪ズ」に示されたように、動詞「擲ぐ」は他動詞として直接補語のヲ格名詞が必要であるが、必要な場合には間接補語として到着場所の二格名詞も現れる。また、「我レ今、流離及ビ四種ノ兵ヲ他方世界ニ擲ゲ着ム」と「汝ヲ釋種ノ宿世ノ報ヲバ豈ニ他方世界ニ擲ゲ着ムヤ」では、ヲ格名詞の直接補語のほかにも、二格名詞の間接補語もある。つまり、「着く」に後接されることによって動詞「擲ぐ」は動作の完了を表しているにもかかわらず、連語論的には変化を与えていないと思われる。

例(18) 守并ニ武則等、軍ト共ニ責メ追フ程ニ、貞任ガ高梨ノ宿并ニ石坂ノ楯ニ追ヒ着テ合戦フニ、貞任ガ軍亦破レテ、其ノ楯ヲ弃テ、貞任衣川ノ關ニ逃入ル。即チ衣川ヲ責ム。『今昔卷第二十五語第十三』

上記の例においては、「犯人を追う」「理想を追う」のように、動詞「追ふ」はもともと他動詞として直接補語のヲ格名詞が必要であるが、「着く」に後接されることによって到着場所の二格名詞も必要となっている。つまり、「着く」に後接されることによって動詞「追ふ」は動作の完了を表しているのみならず、連語論的にも変化が生じたと思われる。

次は普通の他動詞を考察する。

例(19) 又、この男、もののたよりに、聞きわたる人、ありけり。その人ぞとは、この男にももの言ふ人は友だちに

て、もの何にても言ひわづらひ、まめやかに、男のために苦しかるべきことを、言ふと聞いて、からうじて、言ひ着きにけり。『平中物語第一六』

上記の例においては、動詞「言ふ」は直接補語のヲ格名詞が必要となっている。「着く」に後接されることによって、「言ふ」という動作が完了したということになっているが、連語論的には変化がなく、場所を表す二格名詞の間接補語もない。

一方、下記の例のように、動詞「漕ぐ」は「船を漕ぐ」「櫓を漕ぐ」のように直接補語のヲ格名詞が必要となっているが、「着く」に後接されることによって目的地の二格名詞も現れる。つまり、「漕ぐ」には「着く」に後接されることによって連語論的な変化が見られる。

例(20) ものおおぼえず、とまるべき所に漕ぎ着くるほどに、船に浪のかけたるさまなど、かた時に、さばかりなごかりつる海とも見えずかし。(『枕草子』)

他動詞は「着く」に後接されることによって動作が完了したという完成相を表していると同時に、連語論的には三つの種類に分かれている。即ち、「擲ぐ」のようなもともと二格名詞が必要な類と、「追ふ」「漕ぐ」のようなもともとヲ格名詞だけを要求するものが、「着く」に後接されることによって、連語論的には二格名詞も要求されるようになる類と、「言ふ」のような「着く」に後接されることによって動作の完了だけを表し、連語論的には変化が見られない類があると思われる。つまり、「着く」に後接されることによって一部の動詞には連語論的な変化が生じたのであると思われる。

以上のように、古代日本語に見られる「動詞+着」構造は三つのパターンに分けられ、動作の完了を表す完成相になっているが、そのうちの一部分の動詞は「着く」に後接されることによって、連語構造の変化が見られる。同じような連語論的な変化は現代日本語にも見られる。

例(21) 土地の女と、夕ヒチに住み着いてしまったイギリス人船長との間にできた子供だということだったが、僕が知った頃は、すでに五十女だった。(『月と六ペンス』)

例(22) 彼女の小さな黒い眼は、いきなり吸い着くように私の顔にそそがれた。(『はつ恋』)

例(23) あの神戸へ着いたら、誰でも関わらない、一番最初に逢った人を捉まえてその人に咬り着きたいような気がする。カーぱいその人を抱き締めたいたいような気がする——今、僕はそんな気がしている。(『海へ』)

『広辞苑』(第五版)を調べた結果、17例<sup>4</sup>の「動詞+着」形をする動詞が載せてある。自動詞と他動詞から考察すると、表6になる。

表6. 『広辞苑』(第五版)に見られる「動詞+着」形をする動詞

自動詞+着	他動詞+着
居着く、行き着く、落ち着く、帰り着く、来着く、下り着く、染み着く、住み着く、辿り着く、粘り着く、参り着く	追い着く、落とし着く、漕ぎ着く、差し着く、抱き着く、馳せ着く

自動詞の「落ち着く」「下り着く」「来着く」「帰り着く」「辿り着く」「参り着く」「行き着く」は、「着く」がなくとも到着場所の二格名詞を取ることができる動詞からできているものである。それに対して、「染み着く」「粘り着く」の場合は違っている。「着く」がないと、「染む」「粘る」はそのままで付着対象の二格名詞を取ることができない。つまり、「染む」「粘る」は、運動だけを表す動詞で、それだけでは二格名詞を取ることができないので、二格名詞を取れるように「着く」に後接されているのである。言い換えれば、「着く」は連語論的な必要から付加されているものであると思われる。

他動詞の「追い着く」「落とし着く」「漕ぎ着く」「差し着く」「馳せ着く」も同じである。「着く」に後接されることによって、動作「追う」「落とす」「漕ぐ」「差す」「馳せる」が完了し、完成したことを表しているが、二種類に分けることができる。つまり、「落とす」「差す」のようなもともと二格名詞をとれるものと、「追う」「漕ぐ」「馳せる」のような「着く」に後接されることによって、二格名詞をとれるものである。

## 4. 終わり

本稿では先行研究を踏まえ、連語論の立場から古代日本語に見られる「動詞+着」構造を検討した。そして、それぞれの動詞は「着く」に後接されることによって、動作の完了、完成を表す完成相となっていると同時に、一部の動詞には連語構造の変化が生じたということが明らかになったと思われる。

もちろん、連語構造の変化は動詞の語彙的な意味のカテゴリカルな意味が変わるものであって、語彙論的な変化である。一方、完成的な意味は文法的な変化で、アスペクト的な意味である。両者は同じものではない。従って、「動詞+着」構造を考察する時、連語構造の変化をもたらす「着く」と完成の意味を付与する「着く」とを別のものにすべきであると思われる。

## 注

- 1 彭飛（2007）では主に現代中国語の“在+动词”構文が考察されている。“在+动词”構文に似ているものとして“动词+着”構文も比較対象として考察されたのである。
- 2 この表は筆者が蒋绍愚の《动态助词“着”的形成过程》を参考にして、作ったものである。なお、「到達」の“着”について、王力も蒋绍愚も完成相と言っていないが、梅祖麟の「動的な“到达”は宋以後の南方方言の現象として、上海や湖南省、湖北省の方言の完成相の語尾になった」という結論から明らかになったように、この時の“动词+着”は完成相であると思われる。
- 3 岩波書店『日本古典大系』に収録された和文および和漢混合文を調査対象にした。
- 4 ほかに「名詞+着く」の鉋着くと「形容詞語根+着く」の粘着くがあるが、今度の研究と関係が薄いので、分析から省くことにする。

## 参考文献

- 曹广顺（1986）《〈祖堂集〉中の“底”（地）、“却”（了）、“着”》《中国语文》（3）
- 蒋绍愚（2006）《动态助词“着”的形成过程》《周口师范学院学报》（1）
- 梅祖麟（1989）《现代方言里虚词“着”字三种用法的来源》《中国语言学报》（3）
- 梅祖麟（1998）《〈朱子语类〉和休宁话的完成态“着”字》《语言学论丛》（20）
- 孙朝奋（1997）《再论助词“着”的用法及其来源》《中国语文》（2）
- 宋玉柱（1988）《存在句中动词后面的“着”和“了”》《语言研究论丛》（5）
- 太田辰夫（2003）《中国语历史文法》（蒋绍愚、徐昌华訳）北京大学出版社
- 田春来（2007）《〈谈处所介词“著”的来源〉》《浙江师范大学学报(社会科学版)》（4）
- 王力（1958）《汉语史稿》科学出版社
- 杨金萍・肖平（2010）《论古日语「動詞+着」的结构特征和语法功能》《日语学习与研究》（1）
- 于根元（1983）《关于动词后附“着”的使用》《语法研究和探索》（1）北京大学出版社
- 张赫（2000）《魏晋南北朝时期“着”字的用法》《中文学刊》（2）
- 赵金铭（1979）《敦煌变文中所见的“了”和“着”》《中国语文》（1）
- 王学群（2002）《「会話文における“V着”と“在（・・・）V”のふるまいについて》『日中言語対照研究論集』（4）
- 王学群（2004）《「付帯状況を表す“V着”について》『日中言語対照研究論集』（6）
- 鈴木泰（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 張岩紅（2006）《“V1着V2”と“一边V1一边V2”との関係について》『日中言語対照研究論集』（8）
- 彭飛（2007）《「[V+テイル]構文と[在+V][V+着]構文との比較研究——[在+V]構文の“在1”～“在6”をめぐる》」彭飛編『日中対照言語学研究論文集——中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴』和泉書院
- 松本泰丈（2006）『連語論と統語論』至文堂
- 丸尾誠（2007）《中国語に見られる完了と結果の接点——“V了”と“V着”を例として》彭飛編『日中対照言語学研究論文集——中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴』和泉書院
- 楊金萍（2009）『『今昔物語集』に見られる「動詞+着」構造について』『対照言語学研究』（19）

（本稿はお茶の水女子大学アジア女性研究助成金により、まとめた研究成果である）